

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003		
法人名	有限会社 あい		
事業所名	認知症対応型共同生活介護 グループホームあい		
所在地	熊本県八代市島田町863-3		
自己評価作成日	令和4年2月22日	評価結果市町村受理日	令和4年4月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年3月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ここ最近では、新型コロナ感染症で、地域、行政、同グループホームの仲間等に会う機会や、情報の共有等少なくなりました。それでも事業所のネットワークを活かし、リスクレベルの緩和の際には、感染対策を講じ、交流継続をおこなった。コロナ禍の家族面会もなるべく受け入れ家族の協力の基、面会の実現を行った。利用者さんへは寂しさを感じない様な関わりを意識し続けている。利用者の暮らしの継続を行っていく上でも、スタッフ同士ケアの確認、暮らしの見直しを実施。その中でも年を重ねて行くとき取りの時期が訪れます。本人、家族の思いや考え、望みをすり合わせ、介護、看護、医師とこまめに連携を取り取りを行います。目をつぶられるその瞬間まで、“我のまま”が実現出来るように、日々のケアを努力しております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームのケアの姿勢を開所時から“であい、ふれあい、支えあい、慈しみあい”の言葉に込め、入居者が“我のままに暮らせる”事業所として運営している。今回の自己評価には全職員が関わり、自身の振り返りの機会として有効に活用されている。職員意見が夜勤後の過剰勤務を避け、希望休や有休取得により、働きやすい職場環境に努めている。一昨年の人吉、八代地方の大洪水時には被災した事業所へできる事で支援の手を差し伸べ、同業者で運営する研修会や会合の主催に携わるなど、地域でのホームの存在が確立している。入居者の最期までを支えており、重度化に伴う別れはお元気だったころからその時まで長い関わりを共に過ごした結果であり、職員は一つとして同じ最終はないとしてそれぞれの入居者を見送っている。今後も変わらぬホーム運営に期待が寄せられる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	知らなかった者同士此処で知り合い、互いにふれあい、支えあい、慈しみあう。ここでの暮らしが思い描きやすい理念になっている。現場理念は、開設当初入居されていた利用者の方の直筆を玄関入り口に掲示しており、支援での実践や振り返りを行い、日々のケアに指針になっている。	ホームでは入居者・家族の希望に沿い最期までの支援を行っており、お元気な時から最終のその時までの長い関わりを大切にしている。入居間もない方には先ずこの場所と人を知ってもらい認めてもらうこととし、職員は自身の名前を告げてケアにあたり、信頼関係を作っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で運営推進会議が実施出来なく、書面での暮らしの報告になっている。町内活動も感染対策を講じ人員を少なくし清掃活動継続参加。	コロナ禍の中、通常の地域交流は出来なかったようである。地域の清掃活動に職員が参加し、包括主催の認知症啓発活動(オレンジリング)への協力を行っている。国立大とのコラボ企画“オレンジプロジェクト”の開催実施に向けた準備なども継続している。	運営推進会議の資料を地域関係者に直接届けながら、地域との関係継続に努めており、変わらぬ取組が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	さくら会は、地域の方たちの認知症予防の観念から、手芸や脳トレ、外出支援などを行っているがコロナ禍で、お休みが多くなってしまっている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナ感染症感染拡大予防の為、対面での会議が出来ていない。しかし、地域の方への報告書面はなるべくご帰宅のポストへ投函し、近況や意見に行く機会を取っている。意見は、スタッフ会議等でスタッフへ伝えるようにしている。	運営推進会議は直接開催に代わり、書面にて情報を発信している。入居者の現状や研修、ヒヤリハット、人事移動などについて報告している。行政や家族に資料を送付する他、地域には出来る限り手渡しし、直接意見を聞くようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所、包括支援センターへは、コロナ禍で2か月毎の現状報告を行っている。	行政からの通達はメールで届き、感染症対策などについて職員と共有している。ホームの現状は運営推進会議の資料で報告し、コロナ禍の中貴重な情報発信の機会となっている。ホームでの事故事例はなかったものの、行政から資料の中にヒヤリハットについての報告を求められ、すぐに対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行わないを基本にスタッフに会議の度意識づけを行っている。ホーム内の研修会議では”本人にとって心地の良いものなのか”を考え、スタッフ同士で検討し実施、結果の改善等を行い正しい理解を深めている。	ホームが主催する地域同業者との研修会は、年間計画にて様々な研修の機会を持ち、身体拘束や虐待について意識強化を図っている。センサーマットを使用する入居者家族には目的を説明したうえで了承を得ており、転倒回避に利用はするものの職員自身が機械に頼ってしまわず、常に気に掛けるよう申し合わせている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様虐待も行わないを基本に、スタッフ一人ひとり学び振り返る様に意識づけを行っている。スタッフのストレスや苦悩に関しても、スタッフで考え協力し合う様に話し合いをこまめに行う用になっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護について研修する機会があり、制度の理解は進んでいる。また、利用者の中で成年後見人制度を利用している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居申し込み時や、契約に際しては、時間を掛け利用者、ご家族が納得のいく様な説明を心掛けている。又個々に応じ必要な負担に関してはご家族に相談しながら進めるようにしている。介護保険改定に関しては変更点の説明を十分に行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍の為、家族面会や運営推進会議の等の機会もなく、家族からの意見や要望を受ける機会が少なくなっている。短時間でも面会交流が出来、暮らしがわかる様に不定期のお便りや玄関の写真掲示を行っている。	ホームでは月に1回は入居者と家族が顔を見て短時間を過ごすよう工夫している。家族に日用品や散髪代を依頼して来訪の機会とし、窓越しからでも入居者の様子を見てもらうようにしている。家族の意見は面会時や電話などで収集している。写真嫌いの入居者には望遠で近況を撮ったり、お金を心配される方にわかりやすく説明して不安解消に努める等入居者の要望に耳を傾けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフの意見は、日々の申し送りの中で工夫や提案、実施等行われている。月一回のスタッフミーティングでは、スタッフの意見を確認し、方向性を決めている。又スタッフとはこまめに意識しコミュニケーションを取っている。	職員の意見は日々の申し送りや職員同士の会話から収集し、月の会議で検討してケア向上や業務改善に反映している。夜勤者に時間内に業務を終了してもらうための検討会を通じ、過剰勤務を避け希望休や有休取得によりリフレッシュをしてもらい働きやすい職場環境に取り組んでいる。	職員の中に新たに主任を配置し、情報の伝達、意見や相談などがスムーズにあがるようこれまでになかった体制づくりに着手しており、入居者支援に反映されることが期待される。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	スタッフのワークバランスを重視し、シフト作成前には休みの希望を受け入れ働きやすい環境を整えている。又勤務状況や職務に対する意欲、研修などへの参加意欲等を賞与等に反映している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個人の力量を把握し、必要性のある外部研修(ZOOM研修等)やスタッフが希望する研修への積極的参加への促進に取り組んでいます。現場では主任や経験年数、習熟度に応じて丁寧な実践指導を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍の為、他事業所との交流は無いが、八代ブロック会のネットワーク等を活用し、困りごとや助言が必要時交流する機会の確保は出来ている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	可能な限り、本人の困りごとや不安や悩み要望を聞いたり感じられる様な人員配置にし、生活に慣れるまでは、関係作りに努め、気がかり事は記録に残して行き共通のケアが出来るように行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	コロナ禍で面会の機会など制限されている中で、こまめに不安や要望を聞く時間を取るようになっている。又利用者に担当をつける事で、より本人の思いや家族の思いに添えられるように努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	コロナ禍で面会の制限の中家族が安心できる様に、こまめにショートメールや電話連絡を心掛けている。又本人の困りごとにしっかりと耳を傾解決に向かう様に取り組んでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者、スタッフとは、ひとつの大きな家族と捉え、個々に応じ本人の出来る事は役割とし支援助し、その中でも感謝の言葉を伝え支えあう関係を心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で面会制限がある中でも、利用者が家族を感じられるように、衣替え等必要な物品をお願いし、短時間でも面会や様子を伝えられる様に工夫を行った。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍において継続が難し事が多くなってしまった。	職員、入居者同士の馴染みの関係を大切にしており、リビングでの折り紙や手作業を通じて自然な会話がやりとりされている。塗り絵を好きで継続する方、トレーニングの一つとして取り組む方など、個人の目標も大切にしている。入居者に馴染みの地名を話題としたり、昔からの保存食作りに意見を聞きながら食事の一品として提供している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症や身体的重度化により意思疎通が困難になって来ている方もいる。大きな家族として共に暮らしている為、共に支えあう関係があり、助け合いの関係性が自然と出来ている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	開設当初よりつながりを大切にしている。看取りを終えたご家族から、現在も感謝の花束が届け続けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	年々重度化が進み意思疎通が困難な方が増えてきている中で、本人“我のまま”を引き出し、表情や仕草や眼差しから本人の思いを推測し支援している。	職員は入居者に寄り添いリビングでの会話から思いを引き出し、プランに反映するようにしている。重度化の中、意思表示の難しい方にはこれまでの生活の様子や表情から推測している。家族の来所時には短い時間でも意向を確認したり、電話で現状を伝えながら、遠慮なく話してもらうよう投げかけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	年々歳を重ねられ、言葉として話せなくなってきており今まで大事にしてきた情報や本人の思いなどを大切にしている。コロナ禍の為面会が少なくなっているが、面会できる環境を作りながら家族へ相談しながら行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人記録を通し、情報を共有している。又勉強会でケアの確認や本人に沿っているかの確認の機会を持っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーは、本人、家族の意向をしっかりと聞き又担当スタッフに情報を引き出し、ケアの記録を反映している。個人の行動や変化などは、記録に記入し情報の共有を行っている。	入居者を職員の担当制としており、家族との連絡や受診対応の他アセスメントに関わり、入居者の情報を計画作成者と共有し、プランに反映させている。「自分のことは自分でしたい」との本人の思いに、台所仕事や洗濯物干し、飼い猫の世話などできる事でホーム生活に関わってもらうようにしてる。また、汚染時のさりげない対応により自尊心を気づけないケアを盛り込んでいる。定期的な評価見直しにより現状に即した内容としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の言葉をそのまま記録し、背景や工夫など記録し、継続して観察しておきたい場合は、続けて個人記録に記入している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況や世間の状況に応じ、しっかり話し合い本人が希望する事は出来る限り実現できるような対応を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	以前は美容室や病院、ドライブや散歩等本人の思いに添って出来ていたが、コロナ禍で積極的実施が出来ていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人のかかりつけ医師をお願いしている。受診は家族へお願いしているが、本人の状況に合わせて往診に切り替えている方もいる。しかし、コロナ禍で受診や往診の回数も減っているが、主治医への情報をファックスで送ったり、生活の情報を担当者が手紙にして担当医へ渡している。	基本的に家族の対応で希望する医療機関への受診が行われおり、担当職員が家族へ状況報告書を渡し、結果を共有している。重度化・終末期支援など状況に変化があれば、往診で看取り支援が可能な医師へ変更されている。管理者は今後も往診対応可能な医師の存在の必要性を語っており、同法人の訪問看護事業所は心強いものとなっている。歯科については、個々に合わせて往診による治療が行われ、職員もブラシを使いわけながら支援している。また、自身で口の中での洗浄(ぐちゅぐちゅ)が出来なくなった場合はどうするか?なども検討している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護と契約している。週一回利用者の状況や医療的相談、看取り期には看護と介護の役割等の協力が大きい。また看護職が現場にいる為対応しやすい。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはスタッフが面会へ交代で行っていたが、コロナ禍で面会出来ない為、医療連携室と連絡を密に行っている。又状況が安定しホームでの暮らしが可能であれば訪問看護の協力を得て、積極的に退院を受け入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末の事に関しては、入居時と状況に応じてこまめに家族と話し合いの機会を持っている。本人の状態に応じ、家族の協力が不可欠であり、家族に応じて終末期の状況を思い描けなかったり、不安を感じられている時には、時間のゆとりをもって話し、利用者本人の思いに添っているのかの確認を行っている。	入居時に重度化・終末期支援に関するホームの取組を説明し、この1年間で4名の方の最終を支援している。コロナ禍で家族との関わりが難しい時期であったが、状況を見ながら1週間寝泊まりをされた家族もおられる。看取り支援後は職員間での振り返りと、広報誌の中でもお知らせとして報告している。同地域のグループホーム事業所と合同で開催する研修会は、ホームが中心に進めており、重度化や終末期支援も年間計画に含め事例報告や一人ひとりの尊厳に配慮しながら支援していくことなども共有されている。	ホームで看取り支援を受けられたご家族より毎月お花が届き、利用者と共に花を囲む時間が持たれている。今後も日頃の関わりを大切に、ご縁のあった入居者・家族の思いに応えていかれる事を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフは、緊急時の対応に関しての反復研修を受けており、判断や不安に感じた際には、24時間連絡が出来るように管理者、施設長、が体制を作っている。	/	/
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害・火災訓練の訓練は行っている。コロナ禍で地域の方の参加、意見を聞く機会がないのが残念だが、開催が可能になれば是非実施して行きたい。	今年度は12月に避難訓練を、2回目は地震による火災想定とし、火元を探すところから訓練している。災害食備蓄は職員の意見を反映して備えており、ホームに2日分と、法人建物には地域の方の分を確保している。実際、食べてみる事も実践している。トイレの不足は認識しており、携帯用ストックを同法人事業所で行っている。職員も他の地域で災害が発生した際は、災害救助活動に参加するなど、出来得る協力に取り組んでいる。	5月には梅雨を前に水害を含めた訓練を予定しており、取組が期待される。今後、地域の方々の参加を得た訓練や意見を聞く機会が持てることを願っており、実現されるまで引き続き協力体制へのコンタクトなどを継続されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	意思疎通が難しくなっても、スタッフは声を掛け本人の思いや気持ち、どう思っているのか、どの様なことが心地よいかを考えている。又育った環境や暮らしの中の役割が持続出来る様に工夫している。	個々の尊厳やプライバシーに配慮した支援については、特に法人が大切にしている点である。代表者や施設長からも日々の中で伝えられ、職員も認識し支援にあたっている。呼称は苗字や下の名などその時々々の反応や状態によって対応している。季節や好みに応じた衣服の着用は家族の協力を得ており、新たに購入された衣類については、家族の思いや言葉などを伝えている。保湿剤などの購入においても、家族へ写真を撮って伝えたり、販売店などの情報も説明している。	感染症の状況を見ながら理美容は訪問にて支援しており、3月末に予定されている。外部者と交流しながら髪を整えることは楽しみな時間になると思われる。今後も理念に沿ったホームでの暮らしの時間を提供されることを期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ケアプラン内に出来る役割があるが、本人が決定出来るように声掛けしている。言葉が発しにくくなっても、洋服は選べるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活の流れはあるが、利用者一人一人のペースに合わせて、本人に確認している。ここでの生活は利用者主体であることを念頭にケアしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居時の大切にしたい事を基に、選択できる方には選択しやすい様に工夫し、出来ない方に関しては好んでいた色や素材を取り入れるようにしている。又季節な変わり目には、家族へ衣替えをお願いしているが、コロナ禍で受け渡ししかできていない為、家族が新たに衣服を準備されていたら本人へ、家族の言葉や思いを伝えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	決まった献立はないが季節に応じたメニューを心掛けている。三食ホーム内で手作り提供している。ミキサー食の方にも他の方と同じメニューを提供している。野菜、肉、魚は地元のお店で購入し、移動販売にも協力してもらい週一回来てもらっている。感染症が落ち着いたら、利用者と共に選ぶ機会持つ。	季節に応じた献立を作成し、ホーム内での調理が継続されている。昼食は排便コントロールから麦ご飯を提供している。食材も専門店の利用や移動販売で新鮮な旬の野菜が活用されている。現在、普通食の方と、一口大、ミキサー食を個々の嚥下状態に応じて準備し、自立や見守り、必要な介助が行われている。入居者が「おかわり～！」と言える食事環境に努めており、遠慮される方もおられ、状況を見ながら声をかけるようにしている。	現在は、コロナの影響で入居者はお盆拭きや台拭きなど一緒に取り組まれている。今後も出来る入居者の出番が準備されることを期待したい。また、手作り食の提供と、職員も同じものを食べ、思いを共有される現状が継続されることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量を把握し、補食等対応している。一日の摂取量が低下している場合は、カロリーゼリーや本人が好む食べ物類を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔状況が一人一人異なる為、個々に応じて歯ブラシの形状や洗浄剤を使い分けている。必要に応じて、歯科受診や歯科往診をお願いし専門的な助言を頂いている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の中で見守り自立されているのは数人。おむつ利用の方が多い。それでも、日中はトイレでの排泄支援を努めている。	日中はなるべく布パンツを準備している。夜間はトイレの使用が億劫とされる方や、内服の影響、歩行の面などからポータブルトイレを使用される方や、リハビリパンツに替えられる方もおられる。また、尿取りではなく使い慣れたナプキンで対応するなど、個々に応じて支援している。トイレやポータブルトイレは日々の掃除を含め清潔に管理し気持ちよく使用できるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳に甜菜糖と黄な粉を混ぜて飲用してもらっている。水分摂取が少ない方には、一回の量を少なくし飲用する機会をこまめに作っている。又腹部マッサージやホットパックを実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は週3回実施。日程はあるが本人の状況に合わせて変更可能。又身体機能低下の方の関しては本人に合わせた回数になっている。	同性介助への要望や状況に応じながら週3回の入浴を基本とし支援している。硬縮が見られる方も増えている現状であり、安全面から男性職員に移乗のサポートを受けている。また、シャワー浴も多くなっており足浴をしながらかけ湯や利用しやすいシャワーチェアが新たに購入されている。入浴剤も活用しており、特にピンク色の湯は穏やかな表情になれるようである。	身体機能の低下からゆっくり入浴を楽しむ支援については難しいこともあると思われるが、引き続き入浴剤などを活かしながら、職員との会話を楽しめる入浴の時間を提供いただきたい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々に応じて睡眠時間などが異なる為、日中の様子などから入床へのお声掛けをしている。ア豆電球な方真っ暗な方、ラジオを聴きながら休みたい方等様々な対応をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局からの説明書は、個別にファイルしておりいつでも確認できるようになっている。又処方された薬に関しての飲み方や相談内容は記録に記してあり共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナ禍で出来る事が限られ・・・本人が好まれる塗り絵やパズル、日向ぼっこやおしゃべり・・・等できる事を考えています。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出支援ができないが、感染症が改善された場合には、移動販売での購入、花見、お宮参り、祭り等本人家族の協力を得て行っていきたい。現在ではお天気のいい日には縁側での日向ぼっこ等楽しんでいる。	ポータブルトイレを準備し、手作り弁当を持参しての花見をはじめとしたドライブや移動販売車の利用など以前のような外出支援が難しい状況である。現在は、縁側での日光浴や敷地の散歩の継続と近隣の散歩の時間を作っている。散歩の際に摘んだ草花はホーム内に飾ったり、山菜(のびる・つくしなど)は季節の一品として調理されている。縁側は入居者にとって馴染みの山(竜峯山)が望め、お各々が「自分の家はあっち！」と指され、喜ばれている。また、元旦には竜峯山からのご来光に手を合わせられたようである。	「花見ドライブや墓参りに連れて行きたい！」と家族からも希望が聞かれている。また、管理者も日帰り旅行をはじめ以前のような外出を家族の協力を得ながら早く実施したいとしている。感染症の終息が待たれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個々に応じて、ヤクルト販売、移動販売が継続的に来てもらっている為、感染症が落ち着くと利用可能になり利用者の楽しみも増えると思う。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っておられるが、家族の希望にてホームで預かり着信時本人に渡し会話を楽しまれている。はがきなど届くと代読している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	看取りを終えたご家族様より、毎月お花が届く。お花が届くと利用者と共に、お花を囲み花を楽しむ機会になっている。感染対策で、常時換気が必要な場所と、定期的な換気が必要な場所があり空気の流れと防寒対策を工夫している。	感染症への対応から場所に応じた換気を季節毎(暑さや防寒)に工夫しながら実施している。ホーム内の写真や壁面(折り紙などで)を見やすい位置に掲示されている。日中は食堂を兼ねたリビングでの生活が主であり、特に席の配置なども身体状況や相性などを考慮して決定されている。この冬は炬燵も出されたことで、車いす利用者も炬燵で暖が取れ心地よく過ごされたようである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	お話が出来なくとも、ここにいる方と認識できる様に居場所を考えている。その為利用者同士声を掛け、協力し合う場面も見受けられる様になった。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に生活してこられたベッドの向きや、生活に必要な配置を聞き、家族と本人を交え室内の配置は決めている。	入居時の説明(居室内や持ち込みの品を含め)は、この1年玄関先でのやり取りや動画、パンフレットを使って行い質問を受けている。昨今は家具をはじめ馴染みの品の持ち込みは少なく、収納もプラスチックケースが届く例が多くなっている。衣替えの準備は家族に依頼し、衣類の傷みなども伝えている。また、自分の物とわかれるよう、衣服や鉛筆などにもはきり名前を書いてもらう等、個々に応じた依頼も行っている。感染症への対応から面会を遠慮される家族には、「〇〇を持って来てください！」など、状況を見ながら、訪問の機会に繋げている。	気持ちよい居室環境となるよう週2回のシーツや枕カバー交換、ベッド下の掃除も小まめに行われている。また、担当職員を中心に引き出しの中も空箱を活かして整頓するなど細やかな支援である。これらの取組についても家族へ伝える事で安心に繋がると思われる。また、衣類購入を依頼する場合は、感染症の状居を踏まえて早めの連絡と、わかりやすいサイズなどを伝えられるとよいと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々に応じて、出来る事を理解し、安全に生活出来るように支援している。		